

目的 旧法隆寺献納御物である金銅透彫灌頂幡は、推定10メートルを超える大金工品で堂内の高いところから垂下されていたもので、先ず四柱の屋蓋形をなす天蓋を吊り、その下中央に六坪からなる透彫銅板を連ねた大幡を垂れ、その両側に長い垂状をつるし、また天蓋の四隅からは三坪からなる小幡を垂れ、更に天蓋の周辺にある舌状形に沿って蕪袋状をなす垂飾や数条を垂下させたものである。この金銅透彫灌頂幡とはいったい何かということと、天蓋部、大幡部、小幡部にすかしとしてえがかれている唐草文と天人の天衣の美しさ及びこの幡の製作期はいつ頃なのかということを推定する。

方法 現在東京国立博物館内の法隆寺宝物館に陳列されている金銅透彫灌頂幡の実物の観察、天平19年2月の法隆寺伽藍縁起并流記資材帳の「金泥銅灌頂壺具 右片岡御祖命納賜 不知納時」等の文献資料、又朝鮮、中国の同時代と思われる石窟や壁画等の天人の天衣などによって検討を加えた。

結果 金銅透彫灌頂幡とは金銅板製で透彫がほどこされて仏前の荘嚴供養に用いられたもので、金銅製のものとしては他に正倉院に伝えられているものしかみられないが、同時期のものと思われる沢山の織幡が伝えられており、この金銅幡も織幡と同じような構成が確認された。そして透彫の部分には唐草文と共に天人とその天衣によって、地金と透かしの間に実にみごとな空間部分をなしている。それらの天衣は、龍門石窟、天龍山石窟の北魏様式、敦煌の莫高窟の壁画の天衣の影響を受けた推古様式と考えられ、後世の東大寺の大灯籠や薬師寺の三重塔水煙部の天人につながってゆくものと思う。